

土 淨

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 連綿省 (特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和四十八年十一月二日印刷 昭和四十八年十二月一日発行



第三

心

第十二号

1973
12



—目 次— 表紙『不動明王』松涛達文画

教育雑感	里 見 達 人	(2)
特集 開宗八百年と私<下>	稲岡法純・荻須真教・小橋麟瑞	(5)
波の釣舟	俵 口 隆 成	(12)
道		(16)
選訳集講話⑩ 称名念仏の行をたたえる	阿 川 文 正	(18)
念仏・人と歴史⑩ 徳本行者	大 橋 俊 雄	(22)
異僧真覚<最終回>	柴 田 六五郎	(26)
「道」大原への道	高 橋 良 和	(30)
土宗の国宝「鎌倉英勝寺仏殿」	佐々木 洋 之	(32)



昨日も徒らに暮れぬ、今日もまた空しく明けぬ。

今幾度か暮らし、幾度か明かさんとする。

登山状

これは法然上人が私どもにさとされたお言葉というより、むしろ御自身の深い御体験からの叫びと受けとれます。「恥づべし恥づべし、悲しむべし悲しむべし」とも記されていて、これほどのお言葉は自らその悲痛な想いに苦悩せられた深い御心境の吐露としか、私には想えません。法然上人は新しい民衆の宗旨浄土御開宗の前に、道を求め求めてどれほど悩まれたことでしょう。その年上人は既に四十三歳になりました。叡山に登られてから三十年、黒谷にこもられてから二十五年の歳月が立ちました。しかも亡き父君の三十三回忌もすみ、その歿年と同じ年になられたのです。しかも御伝記を見ますと、「悲しきかな悲しきかな、如何せん如何せん」と自らにふさわしい法門、わが身に合った修行はと、多くの智者、もろもろの学者を訪ねて得られず、「教うるに人もなく、示すに輩もなし」と嘆き嘆き経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向い、手づからみづから披き見て遂に善導大師の観經の疏によって、浄土の信仰を確立されたと伝えております。登山状の中の文句も、実はこうした法然上人御自身の魂の絶叫を裏打ちとするお言葉だったのです。

しかし、それはあえて法然上人お一人の言葉であってよい筈はありません。年の瀬もおしつまり、新しい年の春を迎えようとする時、誰しもがこのお言葉をかみしめ、自らの魂の叫びとせねばなりません。日暮れて道遠し。年と共にこの想いは強まります。一日一日が流転の歩みであり輪廻妄執の渦中でしかないとしたらどうでしょう。一日一日が極楽の門から反って遠のいていては生まれて来た甲斐もありませぬ。浄土の春に向って、一歩たりとも急がねばなりません。急がねばなりません。

教育雑感



＜東京淑徳中・高校長＞

里 見 達 人

＝
－
＝
先年、OECDが日本に対して教育についての勧告をしました。

その報告書の最初に、「日本は学校制度というものが発達しているが、本当の教育があるかどうか疑わしい国である」と書かれているのです。

さらに、日本の学校教育は画一的で入試選抜のためのものであり、入試選抜によって現状の社会に合う人間をつくることを目的としている、しかし、これは教育ではない、と云っています。

たしかに、毎年いくつもの週刊誌や受験雑誌が、どこの大学から有名大企業の経営者が高級官僚が何人出ているとか、どこの大学から一流会社にとだけ入社したとか、その大学へはこの高校からどれだけ合格したなどの番付まで掲載しているのです。

こんなことが大学・高校という教育機関の評価の基準として通用する国は、日本のほか

には全くないと思われます。

日本独特の、狭い立身出世主義にもとずく価値感が、教育とは全く無関係な尺度で学校の序列をきめ、いつの間にか学校教育を大きくゆがめてしまったのです。

かりに東大へ数多く合格させる有名高校のどこがいいのか、どういう教育理想をもち、どのように人間の個性や創造性を伸ばそうとしているのかと問うたなら、ただ受験のみでそれに答える言葉もないでしょう。

二

教育とは、知識の習得と並んで、若い人たちの感性とか判断力とかを内側からめざめさせ、人それぞれに内在する自発的思考をよびさまして、真に創造的人間として生きる精神の自律運動を伸展させるための誘導作用でなくてはなりません。

人それぞれの個性を、適性とか能力を、ただ入試選抜制度のもとにねじ曲げてしまいうのでなく、充分に生かし発達させるところに教育の意義があるのです。

そのためにも学校教育は、主体的で創造的でなければならず、それぞれの学校が自主性を持ち、教育の理想をかかげて進むものでなくてはならないことは、云うまでもないのです。

もとより国公立の学校は、基本的には国や自治体の画一化した教育行政から独立した姿勢をとり得ず、必然的に教育の創志に乏しいことは否めないことです。

また私立学校も現状では、国家機構的には国公立の補助機関としての役割分担という事実の上に、私学の生命である自主性も独自性も、それぞれに掲げた教育の理想までもうすれてしまっているようです。

しかし、OECDばかりでなく、真の教育を模索する将来社会の心ある人々が求めるものは、もはや知識のつめこみと受験技術と階層的エリート志向の画一教育ではなく、個々のイマジネーションとクリエイションの開発を主軸とし、それぞれにユニークな理想をも

つ私学教育であり、教育の原点にたちもどる勇気ある私立学校であるはずです。

三

その意味では宗教々育を人間形成の中心におこうとする宗教関係学校の、私学としての存立の意義もまた大きいと思うのです。

しかし、宗教々育の扱い方は仲々むずかしいことです。

もとより高校レベルの宗教々育は、宗教学でもなく、宗教の知識のつめこみでもありません。

生徒の誰もが心に持っている宗教情操に、自分自身の目をむけさせ、内在している宗教的感性をよびさまして、生徒自身の創造的思考につながらせることでなければ、宗教々育はただ形骸化された一方的な講義か礼拝の儀式に終始してしまふでしょう。

自信教人信、人に教えることが難であるように、信じるということは自分自身の新しい創造につながることであり、新しい魂のクリエイトなくしてはあり得ない難中の難だと思われるのです。

「弟子一人ももたずさうろう」と云った親鸞のように、宗教の教師は、教師であって教師でない、若い生徒とともに考え、道を求める仲間でなくてはならないと思うのです。

生徒に教えるのではなく、生徒に考えさせるための媒体となつて、考える種を提供する「生きたとは何か」「死とは何か」等々。

それは時には生徒に苦しみや悩みをあたえるかも知れません。しかし、それが宗教の間でありたいものです。

「いかに生きるか」ということが仏教の理念であるなら、生徒たちが自分自身の生きかたを求めること、その求めようとする心を啓発することが宗教々育だと思うのです。

突飛なことですが、私はときどき考えるのです。法然上人がもし現代に生きて学校の教師になつていられたら、どういう教育をされるだらうか、と。



特集

開宗八百年と私 (下)

私の寺の開宗八百年記念法会

稲岡 法純

(滋賀県建部弘誓寺住職)

お念仏の元祖法然上人が、浄土宗を開かれて、丁度八百年になりますので、私の寺「弘誓寺」では、去る三月二十五日から三日間、記念慶讃大法要を厳修致しました。

浄土宗では、昔から先づ各寺院が記念法要をつとめ、最後に御本山でつとめるのを立て前とし、浄土真宗では、之を反対に、先づ御本山でつとめ、段々に末寺がつとめてゆくのをたてまえとするのだと教えられております。このことについては、昭和三十六年に厳修せられた法然上人七百五十年御忌も、当時の奉修規程、第三条に

『記念法会は昭和三十六年三月一日から七日まで総本山知恩院においてこれを奉修する』とうたい、第四条には『大本山及び本山においては、各々期日を定めて記念法会を奉修するものとする』とし、更に第五条に『浄土宗の寺院並びに教会においては、昭和三十一年四月から同三十六年二月に至る間において記念法会を奉修するものとする』と定められております。私はその頃古老から教わったのですが、明治四十四年正当の七百年御忌の際は、此のたて前を尊重して組寺十四ヶ寺が簀を拾い、八年前

から年に二ヶ寺宛奉修し御本山奉修の前年迄に、全寺院がつとめ終つたと聞かされ、特に弘誓寺は中山と云ふ格式から当地方のしんがりをうけたまわつて、御本山でつとまる前の年につとめ、翌年即ち正當の年には、檀信徒をつれて御本山へと詣でるものであると聞及んでおりましたので、七百五十年御忌は昭和三十五年（御本山の前年）に奉修したのであります。斯如く善導大師の千二百五十回忌（昭和五年）も三上人の大遠忌（昭和十二年）も、同様に夫々前年につとめられており、開宗七百五十年記念法会（大正十三年正當）も、その前年たる大正十二年三月に、先々代の住職當時に厳修されております。

弘誓寺の檀家は現在八日市・愛知・神崎一市二郡にまたがつて二百戸程が分散しておりますので、「御本山の前年につとめる」と云うきまりに対し、私は今改めて先徳故人に敬意を払うものであります。何故かならば、全檀家の総意を結集しようとすれば、ヤレ今年は不作であったからとか、不況であるから、将亦台風の被害があったからとか、なかなかつとめようと思つても、その決定が至難になりがちです。それを「前年」と言い伝えられ、且又実行されてきた。その伝統を重んずる時、その決定に何等の躊躇もなく、しかもその数年前から之が準

備に取りかかれるということ、現に七百五十年御忌の際も、今回の開宗八百年奉修にしても、夫々三ヶ年前から準備態勢に入り、諸堂の修繕、諸経費の蓄積等を進めてまいりました。

而るに宗門全体を眺めると、今回の開宗八百年については、知恩院が逸早くその準備態勢を整えられ、和順会館建設を始めとして、記念法会以外の諸事業を大かた完了されたに反し、全国各寺院における記念法会や記念事業が、何か後塵を拝したように思われてなりません。

而も一宗の開八局ですら、明年開八に當つて元祖さまに献じた灯を全国各地教化センターに持ち別れるよう立案されておりますが、私に云わすなら、全国各地にともされた灯を最後に祖廟の前へ持寄るのが浄土宗のたて前だと申したいのです。

それはそれとして私の寺では五十年前と同様に三日間記念法会を厳修しました。此の法会には大本山清浄華院法主長谷川善務大僧正台下と総本山知恩院副門跡小林大巖僧正を迎え、三日間とも練宿（檀家）より随喜寺院一日五十人、稚児練供養をし、老若男女、檀家は勿論、その親戚且又周辺の村をあげて、法悦に浸ると共に詠歌講を組織されている各寺院よりは連日御詠歌の奉納を願

い、三人の布教師の熱演とともに、念仏の声は四方に充ちたのであります。特に第二日は寺より四軒離れた檀家を練宿にしたため、バス四台を借切って、供奉の列は又見事で、その盛儀は一層でした。

此処で大事なことは二百名近い稚児の一人々々を記念写真にとってあげたことです。恐らく此の子等が成人した晩にも、開宗八百年の勝縁にかかる童心で奉仕したと云うことを写真とともに、その家族親類の人々が語り伝えるであらうことです。そして練宿のお家は勿論、露払いや行列に参加した人々、御詠歌の奉納者、総代、世話



浄土宗開宗八百年と私

荻 須 真 教

(長野教区浄土宗青年会理事・庶務)

昭和四十九年。一九七四年。この年は我々浄土宗徒として記念慶讃すべき年であり、且つ大変重要な年であります。「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、是を正定の業と

人等檀家一軒残らず、心に深くお念仏を刻み込んでくれたことです。偶々此の法会の開白に当って当山副住職の就任披露も致しましたが、その記念に之等の写真を未永く残して貰おうと、アルバムを進呈し、三日間の参詣者全員には、開宗八百年記念「法然さまを讃える歌」のレコードを渡しましたが、之とてもステレオがすべてのお家に備えられた今日、有難い法会の歌が響き流れることを冀つたためであります。

此の八百年の勝縁にあい、住職檀家一同益々お念仏の精進を誓い合うものであります。

名づく。彼の仏の願に順ずるが故に」と中国の善導大師は『観経疏』の中で述べられており、法然上人はこの『観経疏』の出会いによって専修念仏の一行に帰されたのであります。

以来、我が宗祖法然上人が他力念仏の教えに浄土宗を御開宗になってより八百年を迎えます。外来の宗教に仏教を日本人の日々の生活の中にとり入れ、日本人に適した宗教として一般大衆のために仏教運動を展開したのが、法然上人の御教えであります。法然上人をまた「元祖様」と申しますが、まさしく日本仏教界における「元祖」であります。

承安五年の春弥生

祖師は御歳、四十三

弥陀の救いの手をのべて

開き給いし、浄土門

『開八慶讃和讃』

さらに言及するならば、『勅修御伝第六』に、

われ浄土宗をたつる心は。凡夫の報土に。

むまるることを。しめさんがためなり。

とみられるように、余ての人が実践可能な仏教の教えを

一般大衆に提唱されたのであり、偉大なる宗教改革者であつたといつても過言でないと思います。

浄土宗青年会では「浄青アビル」を昨年八月三十一

日京都知恩寺での第二回中央研修会において採択した。

その一部を紹介しよう。

一、若き日の法然上人の中に自己の進むべき道を発見しよう。

一、求道青年の系譜の中に自己の青春を位置づけよう。

一、KYOTO・49・3・14開八浄青会大結集を成功させよう。

一、人間浄化、社会浄化浄青キャンベーンVを展開しよう。

そしてこの「浄青アビル」をもとに、本年度の事業計画として「人間浄化・社会浄化の浄青キャンベーンの強力推進」と銘うって、

一、念仏大行進の展開

一、昭和四十九年三月十四日「開八浄青」の知恩院大結集

一、念仏大行進のための、のぼり・旗・ステッカー等制作

が発表されました。昨年六月より今年七月までのわずか一年の間に、全国八ブロックの浄青会が結成され、「若き日の求道法然上人」を追い求め、新たな浄青活動が開始されました。しかし八ブロックの浄青会が新生命となつて誕生したとはいえ、各ブロック・各教区・各組浄青

会の組織・活動内容等は種々様々であります。けれどもその条件はそれぞれ異っているにしても、我々若き青年宗侶は、宗祖法然上人立教開宗の御精神に基き、宗祖の御教えを心としステップにして、メンバー各人が青年としての英知と勇氣と情熱をもって飛躍せねばならない時であります。

また「開宗八百年」に関して、一般大衆に対するアピールは大変必要なことであり、良きチャンスであります。この開八を御縁に、人間性の喪失がめだつ現代社会において、人間関係の連帯感を強化し、一般大衆とともに素直に手を取り合い、素直に合掌の出来る日々の生活の実現を計りたいものです。しかしこの「開八」がお祭りさわぎで終つてはならないと思います。「開八」がすなわちゴールであつてはならないのです。「開八」は決してゴールではなく、宗祖法然上人の御教えを心とし原点に立脚し、現代社会に生きる浄土宗徒の再発見の旅であり、またそれはスタートの年であると思います。「開宗八〇〇年」は記念慶讃すべき年ではありますが、さらに「開宗八〇一年」以後の未来の浄土宗に向つて、若き青年は一步一步行動し、精進努力しなくてはなりません。我々は「今日一日」の努力が必ずや過去は生かさ

れ、また未来も明るくなることを信じ、「今日」という日を大切に生きなければならぬと思います。そして日々『明るく』『正しく』『和やかに』の生活を実践しなくてはなりません。

御法語を素直に



(神奈川県厚木市天宗寺住職)

小 橋 麟 瑞

世相が激しく揺れ動く中に立って、私は今何をやって良いのか判らなくなつた。それはやることに余りにも多いので、何から手をつけてよいのか迷っているという意味である。

開宗八百年を迎えて、今までやりかけた仕事、やつてしまつた仕事、現にやりつつある仕事、これからやりた

いし、やらねばならぬことの数々が余りにも多すぎる。それらの仕事をすべて開八に結びつけても良いし、別に結びつけなくても良い。言うなれば、いつも開八を迎える気持ちで祖徳報恩に志を寄せているという一語に尽きる。これは誠にキザな表現ではあるが、やることの総てがいつが始まりで、いつが終りということのないこと斗り手がけているので止むを得ない。

それというのも、総て他の手を借りない単独でやれる仕事でないという一つの宿業みたようなものがある。

私が今、一番心掛けていることは、法然上人の御法語を最も素直（すなお）に拝読のできるようになるには何うしたら良いかということである。この金字塔を打ち建てるために二十年この方苦心を払ってきたが、数年前から漸やく曙光が見え始めた。今は概略まとまりはついたが、広くこれを世に訴えなければならぬ。そのためには尚、多少の日子を必要とする。

この過程において最も私を刺戟（しげき）したものは宗門の学識者や宗政人、教師陣の一部の人々が、尤もらしく声を大にして論じ、書き、考えている内容が何うやら時代に迎合し過ぎるのではないか。折角、法然上人が

天台教学の山から下りて本願他力の妙味を実証強調せられた称名往生の教えを、何かしら今の時世にマッチしたもののように判断しているのではないかと思わせる。

この傾向は明らかに法然上人御開宗の歩みを逆戻りさせて山の上に押し上げ押し戻している。「我れ浄土宗を立つる意は、凡夫が報土に生るることを願わさんがためなり」と仰せられた法然上人立教開宗の真意は何処に在るのであろうか。

若し天台によれば凡夫の往生を許すに似たれども浄土を判ずること浅し、

とあって凡聖同居の世界を目標から除外せられている。その除外せられた地点へ押戻そうというのは明らかに祖意にそむくものである。つまり法然上人の奨められた浄土と較べて、仮令求め得たとしても異質のものである。そこに開宗慶讃の意味も失なわれることになりかねない。

開宗八百年は、吉水の清き流れに混入しつつある濁りを復元するに最も相応しい契機でなければならない。時代に相応する教化の方策は当然進めらるべきであるが、教義信条の根本をゆさぶるような解説・法談は救済の本質に触れない。宗教はあくまで「魂」（不完全な表現だが

一応この字を使用しておく）の本質に触れるもので哲学でもなければ道徳でもない。それは心識の最奥に在る生命の核心に関する問題である。

古聖の語に「安心（あんじん）僻越（びやくおつ）すれば万行徒らに施こす」

とある。これを私は法然上人の末流たる一人の念仏信者として、考え方と実践とを誤りのないように服膺したい。宗団がのびて行き、伽藍が壮麗になるだけが報恩ではない。先づそれをやっからということもあるが、安心の確立によって吉水の清流を保ち、そして私自身が「往生浄土見尊体」を目標として進ませていただくと共に、時代と共に変えて行かなければならぬような「宗義に対する謬見」とは「さよなら」したいものである。

これは私の久しい持論で、四十年近くになるむかしの小篇「法然上人十徳頌」の巻頭にも数ページを費して結局、法然上人の念仏は、当時の時代を背景とした所

産では無く、その時代に順応したとか順応しないとかの問題でもない。恐らく時代々々に説き方を変えてゆかなければならぬような教ならば魂の奥底に触れて呉れないであろう。但し耳裡に入り易からしめる工夫は、日に新たに又日に新なるを要する。等々

と纏説した当時と今と少しも変っていない。但し耳裡に入り易いという意味は對手が学者であろうと智者であろうと哲学者であろうと市井人であろうと誰にでも納得のゆく確信を持つ説き方とでも言えようか。しかも経説と共に法然上人の御法語をすなおに拝受して誰でも「よろこび」を以て上人のお奨めにしたがることである。

このためにこそ私の二十年の過去はあった。この為にこそ浄土開宗八百年を迎えての私のよろこびはあった。私はまだ八十歳になっていない。健康に恵まれている。机にかじりつく時間も多し。有難いことである。

— 合掌 —

特集 開宗八百年と私

（下）

隠岐の 釣舟

志す方を問はばや波の上の

浮きてただよう海士の釣舟

隠岐の島はかねてより一度杖を引き、渡って見たいと念願していた国である。そしてこの島には四十年前の友人名越隆正君が居る。今や県会副議長の要職を占めて居るので、居ると云ってもほとんど東奔西走の様子であるが、会って見たいとかねて思っていたのである。同君の生れた善立寺は弟の隆旭師が住職となり、島人の帰依をうけている。ここを地盤として兄の隆正君は県会に登場、四十年前



(京都市左京区専念寺住職)

俵 口 隆 成

東山中学の弁論部で声を枯らせて練習して得た弁舌と、たゆまざる政治的努力で県会議員三期目で、早くも副議長に就任したのである。住職隆旭師も私と貴兄の関係を知ってか、先年布教の約束を祖山の廊下でしたのであるが、直前になって山務の為不参し、次の機会に住職に故障あつて延期となり、さらに次は小生寺内に不幸があつて止むなく代りの方を願つたのである。もう何度も支障の続くのは御縁のなきものとあきらめて居たのに、突如電話で十月十三日より三日間、布教に来よとの命をうけたのである。これは御仏の御

導きであると思い、今度こそ是非行かねばならぬと、あらゆる方策を取って暇を作り車中の人となった。

まだ紅葉には早かったが、島影の近づくにつれて日本海の海の色と島の松林が目にしみる様であった。

今こそ海上二時間余りの航程であったが、その昔、後鳥羽上皇の渡られた時、後醍醐天皇の渡られた時代は如何ばかりであったろうか。冒頭の歌は、後醍醐天皇の作歌であるが、生涯再び本土に帰れるや否や、海上にただよう木の葉の如き釣舟と同様、いづこを港とするやわからぬ境涯であると述べられているのである。流罪とは、むしろ死罪に勝る苦を与えたものではなからうか。事実島の生活は両天皇共苦しいものであったらしい。後鳥羽上皇は十九年程島の暮しをせられ、遂に島で薨去されている。時折訪れる島人のみつぎもので、やっと暮しを立てていられた様子である。

建永二年二月、弟子住蓮安楽等の罪科師匠に及ぼされ、流人藤井の元彦となり給うた元祖法然上人に、弟子法蓮房より恐る／＼「流罪は住蓮安楽の事件ばかりではありません、一向専修念仏興行の故であります。一向専修の興行とどむべきを申されましたら如何でありましょう」と申し述べ、一座の門弟すべて同調した時に、雄々しくも元祖大師の真面目を表現した御法語があるのである。しかもこれが七十五歳の老人の語であるところに有難いものがあり、後凡我等よくよく拝せねばならない。近頃はとしよりも大分若がえって来ているが、この雄々しさを学んで生活の資とせねばならぬと思われる。なお御伝記に現われる法然上人が、すべての面で円満平和の生活態度であり、お姿をおがんでも円満そのものの如きお顔であるのに、この漂とした気魄に満ちた御言葉があることは、末弟の我々の祖師と仰ぐ所以である。

「流刑さらにうらみとすべからず、その故

は、齡すでに八旬にせまりぬ、たとひ師弟同じ都に住すとも娑婆の別離近きにあるべし。たとひ山海をへだつとも浄土の再会なんぞうたがわん。しかのみならず念仏の興行、洛陽にして年ひさし、辺鄙におもむきて田夫野人をすすめん事年来の本意也。いま事の縁によりて年来の本意を遂げん事、すこぶる朝恩と云うべし”

“われたとひ死刑に行はるとも、この事云はずはあるべからず”

念仏はこう云うものである。近年理論的なものが先行し、実践的なものがおくれを取っている。念仏の解剖や念仏の在り方や、念仏の内容と云ったものは多く語られ知りつくされていよう。念仏とは行ずるものである。そして内に在るものはこの様に毅然としたものがあって、口称専修があるのである。

この元祖大師の毅然たる態度は、各宗祖師に超えて立派なものであり、近來一般大衆の大いに学ばねばならぬものである。イエスカノーかどちらかわからぬ様なものが沢山あ

る。生活上にもこう云う立派な生活態度を取らねばならない。師は師として、親は親として、子は子として夫々の立場に於て物に動じない態度を持つならば、乱れて来た世間ももう少し良くなるのではないか。

時折訪問する京都刑務所には、あと一週間で刑務所を出る者ばかり集めて別房で生活をさせ、行刑最後の仕上げをすることになっている。招かれて再三この房を訪れて話しをする。あと四五日で娑婆の風に当ることが出来るので、一同顔はすこぶる明るい。室の空気も他とは大いに異なる。御承知の如く京都刑務所は初犯はほとんど居ないから、刑務所生活の二度以上経験者ばかりである。服の袖先に刺青のチラつく者も居る。

“あんたは何年ここに居たんだね”

いつも私は一人一人にたづねることになっている。もっとも私も教誨師に新任の頃は、まず口称念仏を話したのであるが、今はかえ

って効果薄い事を知って、まず聞くことから始めている。教誨師の努力は速効性のものでないが、いつか報われるものと信じている。

あと数日で社会復帰が出来ると云う時に及び、喜び勇んでいる人々に、私はいつも元祖大師の態度を話すことにしている。

今度出所したら諸事毅然とした態度を堅守する様、一つとして不明朗な点があれば、又此処へ逆もどりとなる、しっかりやりなさい、どんなつらい事があっても、自分がしっかりしていたらかならずのり越えられる。法然上人は念仏弘通の為に実に立派な態度を持たれた、八〇〇年を経た今日でも見事に輝くものがある。恐らくあんた方を待っているもののはづらくて悲しくて腹立たしいものばかりだ、うっかりしていたらこの大浪に押し流されてしまふ、さあ氣を引きしめて出て行ってくれ……。

人間生活はまことに難しい。文明時代にな

って世の中が便利になり、生活が一切機械で動く事になり、人間は働かなくてもよい事になるかも知れない。もうしばらく長生きしていたらもっと便利になって面白いものが見られるかも知れない。きつと口をあけて食物を次々と食べさせてくれる機械が出来、我々は只噛んで飲み込みさえすればよい時代が来ると思われる。とは申せいつまでたっても人間の内面の汚濁は清掃されない。大分平均寿命は延長されて来たが、死ぬ事のない世界は来ない。いつ何時！来るかわからぬ終末と同じ居るのである。世界中の何百万種の薬も、心臓から眼球から手足に至るまで取かえる事の出来る高度の医術も、持てる限りの金銭も一切役立たぬ時が来る。我等は一体どうしたらよいのか。さりげなく「只一向に念仏すべし」元祖大師の御法語には、くめども尽きぬ味がある。さればこそ日夜に称名して、御仏を頼む心が生れて来るのである。

「余事をしし念仏することあるまじ

念仏申し申し余事をなすの思いをすべし」

成道



生すでに尽き

梵行すでに立ち

所作すでに弁じ

さらに有を受けず

如真を知る

いままで過去において、いくたびか繰りかえした生死流転の迷いの道は、いまここに終りをつけ、清らかな修行を完成し、なすべきことはすでになし終り、ふたたび生死の苦しみを繰りかえすことがなく、最高の真理を悟ったということ、この偈は示している。

釈尊が、お悟りを開かれたのは、十二月八日、あけの明星がきらめくころといわれている。

そのときの光景を経典はつぎのように伝えられている。

仏陀となられるやいなや、神々のうちのあるものはいわれた

「さあ、花をまきちらそう、世尊が成道された」

しかし、むかしの諸仏が成道されたときにいわせた神々はこういわれた。

「まだ花をまきちらすのは早い。世尊がその瑞相をあらわすまで待った方がよい。過去の諸仏もみな瑞相をあらわしたのだから」。

そのとき、如来はこれらの神々が考えていることを知って、たちまち虚空高く舞いあがって、つぎのように述べられた。

「けがれはすべて滅んでしまった、

けがれの流れはすべてとまった、

これ以上生まれの路をとらない、

これを苦悩の最後と名づける」

そこで神々はいっせいに花をまきちらして仏陀を祝福された。

その瞬間にすべて闇は消え、あらゆる世界がよろこびに満たされた。仏陀の頭上には宝石の天蓋がかけられ、その光明は三千大千世界を照している。あらゆる仏陀たち、あらゆる菩薩たちは、このできごとを祝福して、新しく生まれた仏陀の徳をほめたたえるのである。

「如来が菩提樹のもとに獅子座に坐り悟りを開いたその刹那には、かぎりない仏陀の奇瑞があらわれた、もしこれ

らを述べるとするならば、幾世代かかっても述べつくすことはできないであろう」と。

成道された仏陀は、七日のあいだ菩提樹のもとに坐禅して身動きもなかった。「無明によって現象が生じる」から「生まれることによって老、死、愁、悲、苦、憂、悩が生じる」まで、および、逆に「無明がまったく滅すれば現象が滅する」から「生まれることによって滅すれば老、死、愁、悲、苦、憂、悩が滅する」にいたるまでの十二因縁を順と逆とに観察して夜をすごされた。つぎの第二週目には、菩提樹のもとから立ち、アジャバーラニグロダ樹のもとにおいてまた七日のあいだ坐禅を続けた。かように七週間のあいだ解脱のよろこびを心感じておられたのである。

第五週目のとき、七日のあいだ雨が降りつづき寒い風が吹きまわったとき、ムチリンダ竜王が世尊の身をとぐろで七めぐりし、頭をもって世尊の上をおおい雨風からお守りした。また四方から竜王が来てみなで世尊の身をお守りしたが、七日たつて雨風がやみ、それぞれ自分の宮殿にかえっていた。

第七週目には、世尊がなお坐禅をしておいでになると、二人の商人が牛車に商品を積んでそのあたりを通りかかった。五百の車の先頭に立っている二頭のすぐれた牛が急に立ち止

まってどうしても動かない。そのとき神のお告げがあった。

「商人たちよ、いま仏世尊がこの世に出現なされた。正覺を感じこの林の中においてになるが、四十九日のあいだ何も召し上っていない。汝たちが飲みもの食べものを差し上げるがよい」

商人たちは、そこに日光のように輝かしい世尊が神々に守られて坐禅しておられるお姿を拝した。ひれふして、さっそく蜜や粉や乳などでみことな飲食をととのえて、これを世尊に献上したのである。

ときに商人たちは、世尊の足もとに頭をつけて礼拝してつぎのように申しあげた。

「わたくしたちは世尊と法とに帰依したてまつる、いまから生涯のあいだ、とわに帰依したてまつる」と。

お 願 い

今般諸般の事情により昭和四十九年一月号より、年会費を左記に値上げしたいと存じます。事情ご賢察の上ご協力の程お願い申しあげます。

新年会費 一五〇〇円

法然上人讃仰会

選釋集講話

第十章 化仏讃歎篇

称名念仏の行をたたえる

阿 川 文 正

(大正大学助教授)

この章の篇目は化仏讃歎篇と云われていますが、またの名を仏意自彰篇、化仏来迎章、化讃念仏章などとも呼ばれています。

これまでは念仏行者としての資格を得るのに必要な要素が述べられて来ましたが、しかし、それらが果して仏の願意にかなうかどうかと云う証明が欲しいのであります。そこでこの章に於いて、すでに要素のそなわった念仏行者の前に阿弥陀仏が現われて、「汝よく仏願に順じた」と自証したもう文により、「念仏こそいよく仏意に契合せる行である」と示そうとされたのが前章から引きついだこの章の意とするところなのであります。つま

りこの章は阿弥陀仏が我々凡夫のために来迎されて、お経を聴聞する善行よりもただひたすら申す念仏の一行をおほめになったことを示されたのであります。それにより念仏の尊といことを一層味わい知らしむる章というべきであります。

法然上人は『選択本願念仏集』の引文に、『観無量寿經』並びに善導大師の『観經疏』の文を引かれてこれを論証されています。即ち『観無量寿經』に、「大乘の經典についてだけはそれはしなかったが、その外の悪い事はどの様なことでもして、しかも何一つ恥じることをしなかった愚かな人がいた。ところが、このような

人でも臨終の真際に善い指導者にめぐりあい、十二種に分けた大乗の色々なお経の名を聞くことが出来た。するとこの人は一千劫という長い間に犯した重い罪をすべて除き去ることが出来た。更にその人は手を合わせて南無阿弥陀仏と唱えることを教えられた。すると仏のみ名を称えた功力によつて、更に長い五十億劫の間、生まれかわり死にかわりして犯した重罪が忽ち消え去り、その時阿弥陀仏は観音、勢至の二菩薩と共に救いのお姿をその人の前に現わされ、**「汝は今私の名を唱えたから、あらゆる罪障が消え去った。そこで私は、汝を私の国へ救うために迎えに来たのである」と讀えられた」と説かれて**います。

これについて『観經疏散善義』には、「阿弥陀仏が慈悲心のもとに救済のお姿を現わして讀えられた言葉に、私の国に救うために迎えに来たとあつて、ただ仏のみ名を唱える功德だけを述べて、經典を聞くものについての功德には何一つふれておられない。これは、み仏が誓われた本願のみ心から考えると、ただ心を落ち着けて一すじにみ名を唱えることを勧められたのである。すみ

やかに浄土に生まれることと、心の乱れやすい雑行とは比べものにならない。この『観無量壽經』は申す迄もなく、大乗の多くの諸經は阿弥陀仏のみ名を唱えることこそ大切な行として勧め、その利益を讀えてあるのもこれがためである」と説かれています。

このように阿弥陀仏が称名念仏の功德のみを讀えられたのは、お経を聞くことは善行であっても、阿弥陀仏が誓われた本願の行ではなく、その行はさまざまなつとめの中の一つであるから、これをほめたえられなかったものであります。そのみならず、お経を聞くことと称名念仏の行とは、罪の消え行くことにも多い少ないの違いがあると『観無量壽經』に説かれているのであります。

十二種に分けられた大乗經典の名を聞くと一千劫の罪が消え、僅か一声の念仏を唱えただけでも五百万劫の罪が消えるというのは何故か、というところの深い人は往生の障が重く、しかも臨終時の苦しみとその身にせまっています。そのような時にたとえ善知識（すぐれた指導者）が多く、教えを説き聞かせても、それを受け入れる心が乱れていて落ちつかず、教えに耳をかたむけることが出来なから取り除く罪も軽いのであります。ところが念仏を唱えることは、たとえ一声であってもそれはただ一

筋であるから、乱れる心をおさめて浄土に落ち着かせることが出来るのであります。心を正しくして念仏を申したならば、その心は不動である故どっしりとして重く、長い間犯した重い罪も消滅してしまうのであります。

法然上人は、念仏の行が余行より勝れているということについて、選択集第十章段に『観無量寿経』並びに『観経疏』の文のみを引いて証明されていますが、これはあくまで上人の經典を尊び敬虔なる態度の表われでありましょう。四十三歳で一向専修に帰入された時点に於て、称名念仏の絶対価値を見出された上人であります。

上人の『無量寿経』には、「念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。念仏の勝とは名号はこれ万徳の帰するところなればなり。然ればすなわち弥陀一仏のあらゆる四智三身十力四無畏等の一切の内証の功德、相好光明説法利生等の一切の外用の功德、みなことごとく阿弥陀仏の名号の中に摂在せり。故に名号の功德最も勝となす。余行は然らず。おの／＼一隅を守る。これをもって劣となす」と申されています。また『同釈』に、「万機を一願に摂し、千品を十念におさむ。この平等の慈悲をもって、あまねく一切を摂するなり」といい、『十二問答』には「念仏の一願に万機をおさめて、おこし給える本願なり」とあ

るように、称名念仏が万行の中から選択された一行であり、しかもそれが仏の衆生済度の大慈悲のもとに立てられた本願であり、更に末法の時代に修する所の行は念仏の一行のみである所から、特に勝れた行であることを強調されているのであります。

上人の一紙小消息には、最初に四不可議をあげていられます。上人は、末法の時代に生きている人々が、往生が出来るかどうかを当てはめてみられておるのであります。これは従来、の仏教を大きく転回させる程重要な意義をもつもので、機にあてて見るといふことは、凡夫性を見つめたといふことで、民衆の爲の仏教をつくられたといふことであります。四不可議といふのは、

- ①修行が少ないからと云って往生出来ないのではないかと疑ってはいけない。
- ②罪人であるから往生出来ないのではないかと疑ってはいけない。
- ③時代が下って仏教が消滅するのではないかと疑ってはいけない。
- ④自分自身悪い事ばかりしている人間だから往生出来ない

ないのではないかと疑ってはいけません。

という四つであります。この中の②は過去から積み重ねて来たところの罪であり、④は現実の欠点を云う悪であります。この造悪重罪の人でも阿弥陀仏の本願を信じ念仏を唱えたならば、必ず往生出来るのであります。それ故、「疑ってはいけません」というのであります。疑うことは即ち阿弥陀仏の本願を疑うことになるのであります。『浄土宗略鈔』に、「かの国に生まれることは阿弥陀仏の誓にて人の善悪をえらばず、ただ仏の誓をたのみたのまざるによる也」とあります。即ち阿弥陀仏は善人か悪人か等の人のより好みをするのではなく、ただ本願を信ずるか信じないかによって救済の手をさしのべられると云われているのであります。そこに阿弥陀仏の本願力の尊とさがあり、念仏の力の偉大さがあるのであります。『四誓偈』の中に、「普くもろもろの貧苦を救う」とあります。人間は精神的、物質的な貧しい苦しみをもっています。私共がこの身のまま唱える称名念仏によって五十億劫の生死の罪を滅していただき、阿弥陀仏の理想世界である清浄国土に往生させていただけるのであ

ります。法然上人は『百四十五箇条問答』に「心のみだるはこれ凡夫の習いにて、ちからおよばぬことにて候。ただ心を一にして、よく御念仏せさせたまひ候わば、そのつみを滅して往生させたまふべきなり、その妄念よりもおもき罪も、念仏だにし候えばうせ候なり」と申されております。一切衆生の救済のために念仏を高唱し一向専修に徹底された法然上人は、末法時代の仏道の修行方法を創設された方であります。そしてこの念仏によって、すべてのものを救われたことは、まさに偉大なる大宗教家という外はありません。私共は、この念仏の行の尊さ有難さ偉大さをしっかりと味わって、日々の生活が念仏の生活になるよう勤めなければならぬのであります。

以上のように、この第十章においては本願念仏の行を讃えたもうことを示されたのでありますが、次に、この念仏を修する人が、念仏以外の善行を修する人よりも更に勝れているということについて述べなければなりません。それは第十一章に記されていますので、次回の方にお願ひすることに致します。



徳本行者

念仏人と歴史

大橋 俊雄

(時宗文化研究所)

一

よく浄土宗の寺にでかけると、境内の一隅に一種独特な書風をもって書かれた名号塔を目にする。見ると下方に、小さく「徳本」と署名してある。東海道や中山道すじには、どこにでもある、といっても過言ではなさそうである。そこには必ずといってよいほど、建てた年時と施主の名が刻まれている。施主とはお金を出した人、教えを受けた人を意味している。徳本行者がお出でになるといいうと、遠近を問わず、多くの人があつまる。池鯉附（知立）の駅では、御輿の前後に群衆が

雲霞のようにあつまり、寸歩も進むことができず、止むなく家のひさしに登り、群がる人たちに十念を授けたという。徳本行者の称える念仏と寺の住僧の念仏と異なるところはない。それなのに何故、徳本行者のお出でだといえ、多くの人たちが千里の道を遠しとせず、そのもとに集って来たのだろうか。

二

よく見ると、ひとりの修行僧が溪流にのぞんだ岩敷の上で、念仏しながら起ちあがっては、静かに礼拝してひれ伏している。ひれ伏しては、また立ちあがり、念仏の声をからし

て大きく仏を礼拝しておられる。さきごろまでは、その礼拝念仏の声が手にとるように大きく聞こえ、谷川の音を圧して樹間にこだましていたのに、今はその声もかすれ、かすかに「我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋痴 從身語意之所生 一切我今皆懺悔」という懺悔の文が聞こえ、南無阿弥陀仏となえながら礼拝しているすがたが見えるだけである。一礼、一礼、五体を地につけ、額を岩にすりつけては念仏している。立って虚空を拝するときは父に、この尊い肉体と生命をもらいながら、与えられた使命を十分に果し得ず、いたづらに月日をおくっていることを訴え、地に伏しては母の胸に泣きくずれる。自分の罪業を深く自覚し懺悔して、その許しを乞うている。許しを乞うたびに、自分の心の内は清らかになっていく。一礼、一礼に力をこめ、真剣なまなざしで仏を見つめている。礼拝は日に七千遍も一万遍もくりかえしている。この人こそ徳本行者その人であり、天明六（一七八六年）二十九歳の時のことであつた。ここ

千津川での別行は寛政三（一七九一）年十月まで五年ほどつづいた、頭髮は垂れて肩をすぎ、衣はやぶれ、肉はおち、骨は出ている、見るからに仙人といったすがた。別行中、一度として髪をそったことはなかった。僧となるためには、江戸の学寮に行つて学ばなければならぬのに、徳本は学僧について正規の学問を学んでいない。学ばなくても、法然上人のみ教えに一枚起請文の真意を自然に学びつくした念仏の行者であつた。

行者は宝暦八（一七五八）年紀伊国日高郡久志村に生れたが、長子、家を継がなくてはならない身、いくたびか両親に出家したいと申ししたが許されない。彼は以前から誰に教えられるともなく念珠を袖に入れていた。田畑を耕かしていると、どこからともなく虫はい出してくるが、またどこへともなく消えていく。耕作するときには鋤をうごかしながら念仏し、山に入って薪木をとるときでも念仏する。もう十歳のころには、五里ばかり東方、大滝川の月正寺に行き、月のうち五日と

か七日とか、日をきめて別時念仏していたという。年端はいなくても、別時念仏に行けばそれだけ農耕はおろそかになる。農民にとって大事なことは農作業だ、しかもたった一人の男の子、家を継がなくてはならない。それなのに別時念仏だといっては家をあける、とんでもないことだ、そこで親族の者たちは寄り集まり「常に臘月晦日の心になりて家業を励むべし。されば三十日は平日よりも安かるべし。一年の三十日すら平生用意せずしては、時に臨んで狼狽すること多かるべし」、いつでも農家は太晦日のような気持で、心をひきしめていなくてはならない。平生のつとめをしっかりしていれば、いざという時になってもあわてることはない、よくよく心して働けとさとしたという。だがこうときめた徳本は、いくら親族のたつての願いとはいいいながら、心をひるがえすことはしない。天明二（一七八二）年二十五歳のとき財部村往生寺の大円について五戒を受け、同四年母の許しを得て出家した。父は安永五（一七七六）年

世を去っている、母としてみれば頼り得るたった一人の子を手ばなさなければならぬ、農業も放棄しなければならぬ、その心情たるや如何ばかりであつたらうか。

三

千津川での修行をおえた徳本は、諸国を行脚したいという心にかられ、急に山を下り、萩原村を通った。もうすでに行者の徳を知っていたのであろうか、村中の男女は師のすがたを見かけると走り出てきて袂をおさえ、どうかここに止まり、我らが後世を助けたまへと願った。あまりのねんごろな頼みに、ことわるすべもなく、村の谷奥に草庵を結んだ。村の中央、家並のあるあたりでは念仏のさまたげもあらうと考えられたからである。昼農耕にいそしんでいる人たち、男も女も、夕方灯をともしころになると三々五々草庵を訪づれ、ともどもに念仏した。人たちの請によつて念仏道場を営み、念仏修行した、いわば教化者の立場に立ったのは、この時が最初であ

るが、以来塩津谷山とか、比叡山・古知谷・熊野三山・須ヶ谷山・摂津勝尾寺など有縁の地をたずねて修行したのち、享和三（一八〇三）年十一月関東に下向し、翌十二月江戸小石川の伝通院で智巖より宗戒兩脈を相承した。その帰途小金の東漸寺に立ちより貫主の宣契にあい問答したが、そのとき宣契が「衆人に日課念仏を申せとお勧めになっておられますが、あなた自身はどのくらい申していますか」と問うたのに対し、「念々不捨に念仏して、昼夜しばらくも間断なければ、日課を定むることなし」、私は別に日課を誓って念仏していない、一般の人は決めてやらないと念仏しないので一応誓わせただけのことだ、私は入る息、出る息がみな念仏だから、ことさら日課など決めていないといっている。それほど徹底した念仏行者であった。行者には『勸誠聞書』という名で書かれた法語集が数多く出されているが、行者の法語は直截簡明、こと法に關しては一点の仮借もなく、頭の頂きから足の爪先きまで辛さしてつらぬく

ようなきびしさがあった。それは多年にわたる荒行にきたえた信仰の結果であらうが、語気にはするどさがあり、「念仏は、必らずとなえなくてはならない。良医の調剤した薬のようなものだ、良いも悪いもない。薬は正直にのめば直る、念仏も同じだ、躊躇することはない、念仏して往生しない者はないのだ」と真向から断案を下している。同じ念仏によつて三昧発得したとはいいいながら、法然上人にはやさしい、円満さがみなぎっているが、徳本行者にはやさしさが無い。鋭い、良くきれる刃物のような禅味を帯びた性格をもっていた。いくつかの奇瑞も伝えられている。三昧発得した行者にして、はじめて得られた成果であらうが、その徳を慕って教えを受けた人はおびただしくいた。だがその行者も、文政元（一八一八）年十月「我れ生涯、大師の一枚起請をもて、自行化他の鏡とせり。汝等も我れとひとしく、この遺訓にしたがうべし。我れの遺属、このほかに一言あることなし」と遺言し、同月六日、六十一歳を一期に世を去られた。



異僧真覺

最終回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

妙春と見まごう如意輪観音の微かな笑みと共に差し出す掌に、真覺の震える指先が触れたかと思つた時、既に彼の躰はふわりと浮いていた。

「心配する事はありません。ほらあれを御覧」

観音の指差す辺り、善住寺の石畳の上に彼自身の骸むくろが小さく横たわっている。

「あれは？ あれはわたしの？」

「そうです。貴方の躰です。もう用の無くなった躰です」

「それでは此の躰は？」

彼は右の人差指で自身の胸を指さしたが、その指は、着ているのかいないのか全く感触の無い羅ろを通してじかに肌に触れた。触れはしたが指は何の抵抗もなく彼の躰の中に入ってしまった。指が躰の中に入ったのか、躰が指の中に入ったのか判らない。彼は慌てて躰中を撫で廻したが何処にも何の感触も感じられない。

「これは一体どうした事だ？」

不審の眼を向ける真覺に、零こぼれるような如意輪の微笑が答えた。

「未だ解らないのですか。貴方はもう私共と同じ世界



萬葉集卷之八 八景圖 八景圖

の住人になったのです」

「えっ！それでは私のような者でもお浄土へ行けるのですか」

「行けるも行けないありません。貴方は弥陀の誓いを信じているではありませんか。『念仏する者を攝取して捨てず』と云う如来の誓いを信じた時から既に貴方はお浄土に迎えられているのです」

「それはその通りです。然しそう信じてはいても……」
真覚は余りにも妙春の面影に似た如意輪観音の顔を仰

ぎ乍ら言葉を継いだ。

「私は若い時、或る尼僧に懸想致しました。そうして終いにとんでもない仕儀に及びました。そんな私でもお浄土へ迎えて頂けるのですか？」

「知っています。その尼というのは妙春でしょう。その妙春こそ私、いや、妙春も私の分身と申せましょう。ちょうど貴方が如来の分身であるように」

「私が？」

「そうです。貴方も貴方以外のすべての人も、鳥も獣も、草も、木も、すべてが如来の分身なのです。そして、私自身もまた如来の分身なのです。涼ろかに耳許に響く如意輪の声に思いを廻らせつつ彼は尋ねた。

「仰言（おほし）ることは解るような気が致しますが、若し私が如来の分身ならば、どうしてさまたまの忌わしい事を考えたり、したりするのでございますか？」

「それは、あの世（人間界）に居る間は誰でも眼に見るもの、耳に聞くもの、鼻に嗅ぐ匂い、舌の味わい、身に触れるものなどに心を奪われ惑わされるからです。それが人の世の逃れる事の出来ない性（さが)なのです。けれども、そう云う欲心が間違ひであり、厭うべきものとして努めてこれを退け、只管お浄土に心に向ける時に始めて

自分が如来の分身である事に気付かせられるのです。」

「私は只管阿弥陀如来におすがりするばかりで、何の能も無い人間でございました。今思えば全く他人様に迷惑を掛ける為に人間界に生れたような浅ましい者でございました。自分の力の無さ、智慧の無さに呆れ果てて、唯もう悲しさと恐ろしさの余り如来様におすがりしたのです。自身が如来様の分身だなどとは、いくら如意輪様に仰言られても合点が参りませぬ」

「貴方が合点出来ずとも、如来様が合点くださればそれでよいではありませんか？ 人間の智慧などと云うものは、如来様から見れば取るに足りぬ小さなものです。それよりも、ちょっと下を御覧なさい」

観音の指差す辺りを見おろすと、夕映えの琵琶の湖面も、比叡、比良の峯々も見見る見る罌粟粒の一点となり、夕陽の輝きもフツと極き消すように消えて黒闇々の世界と変って了った。愕いた真覚の掌が傍に在る筈の如意輪をまさぐったが、掴むものは虚空のみである。

「ああっ！如意輪様っ！」

悲痛な彼の叫びも虚しく消えて、こだまする響すら無い。彼は必死であった。

「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ！」

絶叫ともいふべき悲痛な念仏の声が喉を裂くようにほとばしったその瞬間、彼は足許に何か確かかりした支えのあるのを知った。急いで両の掌で確かめたが、それは木でも金属でも、石でもなく、また衣の手触りでもない。彼の未だ経験した事のない感触である。しかしそれは大地のような確かさで彼の脉を受け止めている。真覚はゆっくりと腰を折るとそのまま其処に端座し瞑目した。

それから如何ほどの刻が過ぎ、夜の白々明けの気配に恐る恐る開いた彼の眼に映じたものは？ ただ果てしもなく拡がる穹窿のみである。彼は太陽を求めて空を仰いだが、陽は何処にも無い。月も星も、無論雲一つ無い青く澄んだ空が茫洋と拡がるばかりである。地平線を持たぬその青の世界は彼の足下にも展開している。

茫然たる彼の顔をかすめて不意に一条の光芒が走った。ハッと我に返った真覚の眼前に紫磨金色の阿弥陀如来を始め観音勢至等数えようも無い数多聖衆の姿が次第に光明の輝きを増して拜せられる。

「おお！ お浄土じゃ。曼陀羅じゃ。」「南無！」

弘化五戊申年正月二十五日。

浄蓮社廓營榮往真覚西堂西帰の日紫雲棚びく。と、今

は大津市民となった大江の里人は伝承している。(終)

あとがき

作者が真覚和尚の存在を知ったのは、去る三十九年七月二十二日、当時瀬田町役場の友人大橋清三君の案内で善住寺を訪れた時である。住職三宅有信尼は和尚の事蹟について話して下さったが、和尚逝つて既に百余年、その人物像はまさに忘却の淵に沈まんとしていた。郷土の歴史と民俗に詳しい大橋君は、これに先立って瀬田文化協会の機関誌「静流」に和尚に関するレポートを載せていた。一読した私は愈々興味を唆られ、何とかこの人物を描いてみたいと思いつつ遂に数年を空費してしまった。

四十三年の夏再び訪れた同寺には有信尼既に亡く、聞けば其の年(三十九年)十二月に遷化されたという。私は臍を噛んだ。そんな気持が私を駆り立て、大橋君を引っ張り出しては万福寺を訪い、大蓮寺に資料を求めた。しかし万福寺は大萱焼けと云われる天保年間の火事に一切を焼亡しており、大蓮寺は作中にある如く天明八年の大火に記録を失っているのみならず、戦時下五条通疎開

のため仁王門に移転してしまっていた。止むなくと言っては誠に失礼だが善住寺現住三宅貞俊尼を頼って資料を漁った。

和尚の生家深田清次郎家は何時の頃か転居されて此の地に無いが、当主道夫氏は、去る三十年四月二日の和尚の遠忌には志を寄せられたと聞く。治兵衛家は当時のままだ萱に在り、当主治兵衛氏は和尚が建立した「両親碑文」を見たいという私を炎暑の大萱墓地に案内して下さい。その時伺った処によれば、同家は先代治三太郎氏、先々代梅吉氏であるが歴代治兵衛を通称としておられる。和尚が仏壇を贈った時、舎兄治兵衛と記しているのは梅吉氏の事で、幼少時養育をうけたのはその養父の治兵衛氏である。

拙作掲載中の「浄土」誌を読まれた当代治兵衛氏は今年四月、後堂に祀つてあった和尚作の小仏像(約百体)を収納する為厨子を寄進された。(写真参照)

甚だ勝手な言い分で読者の顰蹙を買うかも知れぬが、作中しばしば和尚を冒瀆するが如き表現を用いた作者の罪も、治兵衛氏の此の善根によって聊かでも軽からしめられるかも知れぬ、と心中ひそかに謝する思いである。

南無阿弥陀仏

道

大原への道

洛北大原の紅葉は十二月中旬でもまだ色があせていない。三千院の往生極楽院の庭の紅葉は木々の種類が多いのかまことに黄紅と美しい。昔は大原に杖をひく人は少なかったが、今ではウイクターでもマイカー族が出かけるので、この幽境もやはり公害に悩んでいることである。

その三千院の前の川を呂河、律川と称するので、これを呂河律川と一口に読んでいる。呂律がまわらぬというのは、普通この川からきたのであって、この三千院のあたりが、天台声明の発祥の地ということであるから、この呂河、律川の意味もわかると思う。

律川を渡ったところに勝林院がある。これは天台宗の寺院であって一度この「道」にとりあげた大原問答のあった地で

高橋良和

ある。

前のときにはこの大原問答のときに、熊谷蓮生が鉈を捨てた鉈捨ての藪のことを記したと思うが、今日はその大原問答のことについて再び述べてみたいのである。

大原談義というのは天台座主であった顯真が、浄土の法門について法然上人と大原の勝林院において、上人と問答して、天台の法門と、浄土の法門との優劣を競うのであって、それは文治二年（一一八六）の秋のころであったとつたえている。

顯真は弟子三十余人を伴って、この勝林院の丈六堂に会したのであって、丈六の堂というのは勝林院の本堂のことである。

法然上人の方は俊平房重源以下の弟子であったが、その法談は一日一夜つづいたというのである。

そして問答のあと、

法印よりはじめて満座の衆、みな信伏しにけり。かたちを見れば、源空上人、まことは弥陀如来の応現かとぞ感歎し

あへりける。法印香炉をとり高声念仏をはじめ行道したまふに、大衆みな同音に、念仏を修する事三日三夜、こえ山谷にみち、ひびき林野をうごかす。信をおこし縁を結ぶ人多かりき。

と四十八巻伝に記している。

法印というのは顕真座主のことである。そしてこのあと顕真は、余行を捨てて、一向専修の行者となつたとつたえているから、顕真もこの法然の説く念仏のおしえに帰依したことはまちがいないといえる。

この大原談義はこのように法然上人の念仏の優ぐれていることを四十八巻伝に記しているが、このことについて、天台側の言い分が一つある。

というのは、顕真というのは天台座主なのである。

当時の天台座主の地位というものがどの程度であるか、想像がつくだろう。そのころの比叡山延暦寺がどのような権力をもっていたか、その延暦寺の座主職にあるのが顕真であるが、そこらにいる僧とは異なっている筈である。

それに比して法然上人の地位を考えてみるがよい。比叡山で修行したとはいえ、念仏のおしえも、天台のおしえより優れているとは考えられぬし、そうであるから法然はまだ若い僧である。

そのような若い僧に、天台座主もあらうものが問答しようと思込みをするかどうか。おそらく顕真はそのような若い法然上人に問答など申込んだことはないと思う。

もし顕真が大原問答の座にいたということだと、法然上人と比叡山延暦寺の若い僧とが問答したのであって、おそらく顕真はその問答の裁判をしたのであらうと思う、ということを書いた書物があることを聞いた。

真実性の有無はとも角としても、このような意見もあることを紹介してみたまでである。

浄土宗では思いもよらぬ解釈であるが、この出所をゆくり調査して見たいと思う。この資料をおしえてくれた天台の碩学も、その出所についてははっきりと示してくれなかったが、今一度この問題について意見を聞きたいと思っている。

洛北の秋はもう冬と同じくらいの寒さである。

三千院の紅葉も霜をうけて一入あざやかな色をみせていることであろう。勝林院の本堂はその紅葉のなかにあって、古さびて今もなお残っているが、ここは比叡山の西塔である。

丈六の仏は昔のものではないが、本堂に坐してこの仏を拝すると、この内陣を行道した法然上人のことを想像してみた。木々にこだまする念仏の声が、山野を庄したという意味もわかるようである。

浄土宗の国宝

鎌倉英勝寺仏殿

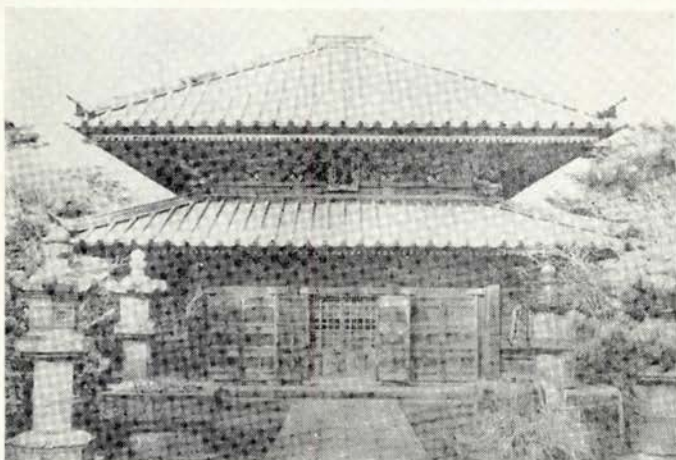
英勝寺は鎌倉扇ヶ谷御前ヶ谷にある。こじんまりとした七堂伽藍が整然と閑静なたたずまいをみせている。五山の一つ寿福寺が東隣りに位置している。鎌倉には古寺が多いが、英勝寺は東光山と号し江戸初期の創立、当地にのこる尼寺の代表的寺院でもある。

当寺開基は太田道灌の流れをくむ太田康資のむすめで徳川家康の側室として仕えた勝の局である。家康の死後、お勝は剃髪し英勝院と号し、先祖菩提のため道灌ゆかりの地、扇ヶ谷に一寺建立の請願を幕府に願ひ出た。寛永十一年（一六三四）のことである。二年後に念仏道場として創立、家光の命により開山には水戸頼房の娘小

良姫を迎え住持とさせた。玉峯清因がこれである。以来、住持は代々水戸家より迎えることを習いとしたため、当寺は「水戸の尼寺」あるいは「水戸の御殿」といわれた。

江戸期の創建ではあるが、こじんまりとした仏殿、唐門、祠堂、鐘楼等の諸伽藍は清楚な姿をあらわし、調和のとれた配置がなされている。

ここにあげる仏殿は寛永十三年（一六三六）の建立で他の唐門等とならび桃山時代の形式を備え、唐様、和様の折衷様式をもった建物、重層で銅板葺、仏殿としてあまり大きくはないが重荘感は他にひけをとらない。特に十二支を刻んだ蛙股をめぐらし、工法も細部に至って自由な姿で表現されている。浄土宗寺院ではあるが堂の様式は禅宗寺院の仏殿形式を模して作られている。禅宗色のつよい鎌倉の影響によるものか……その他、当寺には阿弥陀三尊を祀り英勝院の位牌が安置された祠堂・袴腰付鐘楼・唐門など数多くの重宝を存している。鎌倉にあつて室町末期の桃山建築形式そのままの姿を残しているのはこの英勝寺のみである。こうしたところから昭和三十三年県の重要文化財に指定された。（佐々木洋之）



仏殿（宝珠殿）



英勝尼の像

鎌倉
英勝寺

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
(送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十八年十一月二十五日印刷
昭和四十八年十二月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

絵伝『法然上人』

かねて若い世代にむけての伝道文書をとの声しきりでしたが、このたび開宗八百年記念出版として、勅修御伝にのつとつた新しい感覚の絵伝『法然上人』が発行となりました。

青少年はもとより、博い層にわたる檀信徒方への施本として、開八慶讃法要などの機にご利用頂きますれば幸甚です。

B5 変形版 (タテ20cm × ヨコ22cm) 24頁

定価	180 円	〒 80 円
50冊以下	単価 180 円	送料実費
50冊以上	" 170 円	
100冊以上	" 160 円	} 送料無料
200冊以上	" 150 円	
500冊以上	" 140 円	
1000冊以上	" 135 円	

京都市東山区林下町
発行所 浄土宗宗務庁

浄土宗開宗八百年記念トラクト 『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価 160 円 (〒 70 円)

(200部以上 単価140 円 送料実費)

内 容

- 第一編 法然上人のあゆみ
- 第二編 浄土宗のおしえ
- 第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番